

松村昌家著

『大英帝国博覧会の歴史：

ロンドン・マンチェスター二都物語』

京都：ミネルヴァ書房、2014年、4、104円、284頁

小宮彩加

タイム・マシーンに乗って好きな時代に行くことができるようになったら、私がいの一番に行ってみたく思っているのは、1851年のロンドン万国博覧会だ。庭師だったパクストンが設計した巨大なガラス製のクリスタル・パレスの中に入って、ニレの巨木を見上げたり、「水晶噴水」を眺めたり、いろいろな展示を見て疲れたらシュウェップスを飲んで休憩なんてできたらどんなに楽しいことだろう。そう思うようになったきっかけは、松村昌家氏が1986年に出版した『水晶宮物語——ロンドン万国博覧会1851』（リプロポート、1986年）を読んだことだった。それから約30年の時を経て昨年出版された『大英帝国博覧会の歴史 ロンドン・マンチェスター二都物語』では、ロンドン万国博覧会だけでなく、マンチェスター美術名宝博、第2回ロンドン万国博覧会、1910年の日英博覧会までが取り上げられており、まるで松村氏がタイム・トラヴェルをして見てきたかのように詳細に生き活きと描かれている。

本書は全部で5つのパートからなる。「パート1 一八五一年ロンドン万国博覧会と水晶宮」では、美術協会のジョン・スコット・ラッセルが考えついた製造品年次大博覧会のアイデアに端を発し、協会の新しい会長にアルバート公が就き、そこにパリ万博を視察したヘンリー・コールが加わったことで始動した国際博覧会の計画がどのように実現され、大成功を収めるに至ったかが詳述されている。建築委員会がハイド・パークに建設する万博会場の設計図を公募したものの採用に値する作品がなく、計画が暗礁に乗り上げそうになったところにジョゼフ・パクストンが救世主のように登場し、ガラスと鉄骨製の巨大な温室のような水晶宮が作られたことなど、水晶宮建築に至るまでの紆余曲折については『水晶宮物語』にも述べられていた。今回はさらに多くの資料を用い、政治的駆け引きやビジネスの交渉を丁寧に追い、万博開催までの道のりがダイナミックに描かれてい

る。大量の窓ガラスを供給したチャンス兄弟社にはその後 1872 年に岩倉使節団が視察に訪れていること、水晶宮内部が赤、青、黄、白の 4 色で塗り分けられていたこと、アルバート公が万博会場建設中の労働者たちを慰問するために 250 ガロンの樽づめのビールを差し入れたこと、パクストンの設計はすべてが「8」で割り切れる数字になっていきわめて合理的であったこと、パクストン・ガターという雨どいのお蔭で雨水も見学者の吐く息による水蒸気も吸収できる仕組みになっていたことなどなど心底感服しながら読み進めたのである。

「パート 2 シドナムの水晶宮 民衆教育と娯楽の殿堂」では、ロンドン万博閉幕後、水晶宮がパクストンを中心とする水晶宮カンパニーにより買い取られ、シドナム丘陵に移され、娯楽と教育の融合の場として 1936 年に焼け落ちるまで利用されていたことが書かれている。シドナムの水晶宮には「彫刻・建築を主とした芸術の殿堂や民族史館を配したウィンター・ガーデンがあり、絶滅恐竜のテーマ・パークがあり、諸種の教育施設」(102 頁)があり、さらには 4000 人の演奏者・合唱団の登壇が可能なオーケストラ舞台のある音楽の大殿堂があったそうだ。1859 年にヘンデル没後 100 年を記念してシドナムの水晶宮で盛大に催されたヘンデル・フェスティバルのことも詳しく書かれている。その翌年に書かれた『大いなる遺産』の中で、ハーバートが「調子のよい鍛冶屋」というヘンデルの曲にちなんでピップのことを「ヘンデル」と呼ぶようになるが、ヘンデルは、ドイツ生まれだが、1826 年にイギリスに帰化し、イギリスの国民的音楽家だったのである。彼は、「コーラム捨て子養育院」に立派なオルガンを寄贈したり、慈善演奏会を開いたりして、画家のウィリアム・ホガースと共に捨て子養育院の有力な後援者としても活躍した。「コーラム捨て子養育院」は現在ではもうなくなってしまったが、養育院に寄贈された絵画コレクションは、ブルームズベリーのブランズウィック・スクエアのファウンドリング博物館に集められており、ヘンデルと捨て子養育院との関係を示す展示もここで見ることができる。

「パート 3 マンチェスター美術名宝博覧会」では、1851 年の万国博覧会と、次の 1862 年のロンドン万国博覧会との間の 1857 年に、新興工業都市マンチェスターにおいて開催された美術名宝博覧会が取り上げてられている。1851 年の万博では、絵画を除け者にしたような美術部門の構成となっていたことが大きな反省点であり、それを受けて 1862 年の国際博覧会では、ピクチャー・ギャラリー

ズが特設されるようになっていたそうだが、松村氏は、それら二つの万博の間に開催されたマンチェスター美術名宝博覧会が、「1862年万博にとってのきわめて重要な予備的な役割を果たした」(114頁)と述べている。個人・団体を合わせて1000件を超えた美術品の貸し出しがあった中でも突出していたのが、第4代ハーフォード侯爵からの貸出品だったそうだが、ハーフォード侯爵というのは、ロンドンのマンチェスター・スクエアにある美術館、ウォレス・コレクションを創設した貴族だという。ウォレス・コレクションは、私も在外研究中によく訪れた美術館だが、そこに飾られていた絵画の多くがマンチェスター美術名宝博覧会で展示されていたとはまったく知らなかった。次回渡英した折には、そのことを頭において鑑賞したいと思う。さらに、マンチェスター美術名宝博覧会では、初期イタリア派の絵画の収集に熱心だったアルバート公のコレクションからの貸出品、そして Hogarth、Gainsborough、Rembrandt といった近代巨匠たちの絵画も多数展示されていたそう。その上、当時はまだ評価が定まっていなかったラファエロ前派の作品も何点も出品されており、マンチェスター・マンがラファエロ前派にも深い関心と共感を寄せていたことが分かるということだ。

「パート4」は、「1862年国際博覧会」についてである。イギリスは、クリミア戦争、アロー戦争を経験し、この当時アメリカでは南北戦争の最中だった。「1851年の万博が平和主義と産業と有用知識の時代を要約した」(176頁)のに対して、1862年万博ではアームストロング砲などの最新兵器の展示もあり、時代の変化を反映していたことが分かるという。そして、日本人にとっては大変興味深いことに、幕末遣欧使節団も万博を見に行っていたそう。『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』に載った5月1日の開会式典の図版には、7人の侍の姿がはっきりと描かれているというのがおもしろい。この7年後、1868年の戊辰戦争でアームストロング砲が使用されたり、遣欧使節団に3人も藩士を派遣していた佐賀藩で、日本で最初の国産アームストロング砲の製造が成功していたことにも、万博視察の影響が表れていると松村氏は指摘する(博覧会での幕末使節団については、松村氏の別の著書『幕末維新使節団のイギリス往還記』柏書房、2008年も参照)。1862年国際博覧会には、日本製品展示場が設けられていたそう。しかし、これは日本が公式に出展したわけではなく、駐日イギリス公使オールコックが一人で収集したものが展示されたのであった。中でも驚きと賞賛を集めたのは、根付

のコレクションだったという。『キャッセル社絵入り家庭新聞』が、根付のグロテスクなデザインが『パンチ』のジョン・リーチの描く絵と似たところがあると述べているのが興味深い。しかし、日本使節団から見ると、この時の日本の展示場はガラクタを集めただけのような印象だったという。

「パート5」は「日英博覧会 イン・ロンドン」という章題で、1910年にロンドンの西郊、ホワイト・シティで開催された日英博覧会について述べられている。ちょうど日本での単独開催を断念したところに誘致されたので、国は18万ポンドの大金を拠出し、総力をあげて開催の準備をしたそうだ。「日本歴史館」、「東洋館」、「日本政府省庁館」、「美術の館」、「日本庭園」などがあり、日本についてかなり詳細に紹介がなされていたようである。日英博覧会の開催期間中の1910年9月29日には日韓併合が宣言されていたのだが、この時代の日本がコロナイジング・パワー（植民強国）になっていたことを印象付ける展示内容だったという。しかし、日英博覧会で一番圧巻だったのは、やはり「美術の館」ではないだろうか。日本からは仏画や浮世絵など、名作が296点も出展されていたというのだ。対するイギリス側も、ジョン・リーチ、チャールズ・サミュエル・キーン、デュ・モーリエイ、ジョン・テニエルらによる『パンチ』絵のコレクションのほか、レノルズやゲインズバラ、J・W・ターナーなど1000点以上の美術品を展示していたそうだ。

さらに、もう一点、この日英博覧会の目玉だったのは日本庭園だ。1909年の12月、ロンドンの冬はさぞかし寒かっただろうが、日本庭園の工事が始まってから約5ヵ月かけて「平和庭園」と「浮島庭園」という、趣の異なる二つの庭園が造られ、好評を博したそうである。昨今、日本ではイングリッシュ・ガーデンがもてはやされているようだが、伝統的な日本庭園の美しさを今一度見直したいものである。

1851年のロンドン万国博覧会から1910年の日英博覧会までを追った本書は、ここ30年ほどの松村氏の万博に関する研究の集大成である。ディケンズやギヤスケルといったヴィクトリア朝文学の研究者としての幅広い知識と、一次資料を細かく正確に読みこむ歴史家の緻密さと、美術や音楽に対する鑑賞眼を持つ松村氏だからこそ可能であった秀逸な万博研究である。そもそも、一連の研究のきっかけとなったのは、松村氏が1978年に在外研究でイギリスに滞在されていたと

きに、住まいのあったロンドン郊外のブロムリーからディケンズ・ハウスのあるロンドンまでを汽車で往復するときの途中停車駅が「クリスタル・パレス」だったことだという。本書のような優れた研究を産むこととなった、このときの運命の巡り合わせに感謝したい気持ちである。

(明治大学教授)